共通1次試験と第2次試験

入学試験の実態を調査しようとするとき，その大学の受験者全体等の共通1次試験の得点の分布，第2次試験の得点の分布，共通1次試験の得点と第2次試験の得点の相関調査等は最も基本的なものであり，ほとんどの大学で大なり小なり調査研究が行われている。これらを含めて57年度の研究から特徴あるものをいくつか述べることにする。

共通1次試験も回数を重ねるに従い，社会では，いわゆる輪切り現象の存在が論じられている。実態はどうなっているのかについていろいろのアプローチで調査研究がなされている。その大学の受験者の共通1次試験の得点分布の，全国の受験者の得点分布における相対的位置を調べたり，得点分布のピークの幅及びそのとがり具合等を調べ，年ごとの変化を比較検討している大学が多い。年ごとの変化の少ない大学や，年々散らばりが小さくなる傾向のある大学等があるようである。

共通1次試験の総合得点や各科目の得点と第2次試験の総合得点や各科目の得点との相関係数の年ごとの変化を比較検討している大学も多い。各大学の受験者集団や第2次試験の内容のちがい等により相関係数も大学により異なるが，共通1次試験と第2次試験の同一教科間の相関係数では，外国語や理科が高く，国語が低いという結果を示す大学が多いし，また年々相関係数が高くなっていくことを指摘する大学もある。受験者の層の変化を調べたり，出題した問題が受験者にとってどのようであったかを反省する材料等に利用されよう。

共通1次試験の各科目の得点や第2次試験の各科目等の得点に，どのようなウェイトをつけて，加え合わせて総合得点を求めたらよいかについての研究も多い。入学後の成績の良い者がなるべく多く合格者となるようなウェイトはどのようなものであるかを，入学した学生の資料をもとに調査研究をしている大学もある。またウェイトを変化させたときにどのように合否が入れ替わるかも研究されている。

共通1次試験や第2次試験において，理科や社会は複数の科目の中から受験者に選択解答させているが，その場合選択した科目により受験者を分類し，その分類した集団の成績について比較検討を行ったり，選択した科目の得点の相関等も求められている。また第2次試験に新しく科目を加えた場合の影響等についての調査報告もなされている。